

◆巻頭言◆

“現場”から学ぶこと、“未来”へ向け伝えること

福島県環境創造センター所長 青木浩司



全国環境研協議会北海道・東北支部の令和5・6年度の支部長を務めております。福島県環境創造センターの青木でございます。よろしくお願いいたします。

まず、9月末に発生した石川県能登豪雨で犠牲になられた方々に対し、謹んでご冥福をお祈りいたします。本年元日に発生した能登地震の復旧・復興も半ばでの災害となり、被災された皆様に心からお見舞い申し上げます。

当センターは、平成23年3月に発生した東京電力福島第一原子力発電所事故により放射性物質で汚染された環境の回復・創造に取り組むための総合的な拠点として、平成27年度に開所しました。敷地内に同居する国立研究開発法人日本原子力研究開発機構及び国立研究開発法人国立環境研究所と緊密に連携・協力して、「モニタリング」、「調査研究」、「情報収集・発信」及び「教育・研修・交流」の4つの事業に取り組んでいます。

東日本大震災・原子力災害から13年半が経過し、除染活動や自然減衰による空間線量率の低下、被災地におけるインフラの整備、避難指示の解除に伴う避難者の一部帰還など、全国の皆様の御支援やお力添えもあり、本県の復興・再生は着実に進んできました。一方で、廃炉や汚染水・処理水対策、除染で発生した除去土壌等の処分先など大きな課題があるほか、未除染地域の残存、避難者帰還の停滞、根強く残る風評などの多くの課題も残されており、私たちは原子力災害からの復興のために、あらゆる“挑戦”を粘り強く続ける必要があります。

本県では、震災及び原子力災害の現場を「見て」「聴いて」、復興を「考える」ため、新規採用職員全員を対象とした現地研修を実施しており、当センターから参加した職員からは、震災当時のことや、復旧・復興に携わった方々の生の声を聴いて大変感銘を受けた等の感想が聞かれました。彼らには、研修で感じたこと・考えたことを胸に刻み、本県の復興を担う人材となることを期待しています。

当センターは、愛称「コミュタン福島」という学習施設を併設しています。コミュタン福島は、東日本大震災・原子力災害との闘いや復興の歩みに関する展示や全球型ドームシアターを有しており、福島の実状や環境などについて学習することができ、これまでに65万人以上の

方々に御来館いただいています。

また、各年齢層に応じた講座を開講しており、小中学生等の受講者が実験やフィールドワークを通して“科学的な思考力”を育み、“学んだことを自分の言葉で伝える”ための発信力を向上させることを目的とした人材育成事業にも積極的に取り組んでいます。



さて、当支部の活動についてですが、今年度の支部総会を6月に新潟市で開催いたしました。コロナ禍で書面開催を余儀なくされていましたが、昨年度に続いて、対面での開催となりました。「Face to Face」で濃密な意見交換の場となり、改めてオンラインにはない良さを実感したところです。

今回の支部総会では、各機関の担当者・担当業務を一覧にした名簿の作成について提案があり、支部内で共有することとしました。意思の疎通が図られ、研究者同士が気軽に意見交換できるようになる第一歩となれば（コロナ禍前は当たり前のようにできていたことですが）と考えています。

また、総会翌日の視察会では「新潟県立環境と人間のふれあい館（新潟水俣病資料館）」を訪問しました。語り部の方から水俣病の発症や訴訟等の話を伺うとともに、貴重な映像資料や展示を拝見して、このような悲惨な公害は二度と繰り返してはならないとの想いを強くしたところです。「富山県立イタイイタイ病資料館」等、公害問題の教訓を後世に伝える資料館は各地に設置されておりますので、これらの施設と連携していくことも全環研の今後のあり方として検討してもよいのではと感じています。

任期も終盤となりましたが、支部内各機関そして全国の会員機関とのコミュニケーションを大切にしながら、支部及び全環研の活動が円滑に進捗できますよう努めてまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。